

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0462 ◆◆◆

17/12/13

【 干支やラッキーカラーから、来年の相場を考える 】

今年も残り1ヵ月をきるなか、先週は、「ひと足早い来年の相場見通し」をレポートしたが、今回の当レターでは、来年の為替を中心とした金融市場の見通しなどについて、前回レポートとはまた異なる視点で考えてみたい。

<< 干支とラッキーカラー >>

干支、いわゆる十二支というものには、それぞれラッキーカラーが存在している。昨年の「申(サル)」は、「赤が運氣の上がる色」とされ、野球は「赤ヘル軍団」の広島カープが25年ぶりにリーグ優勝、赤の兜が美しかったNHKドラマ「真田丸」が大人気となったことなどは記憶に新しい。

そんな干支とラッキーカラーからすると、今年「酉(トリ)」年のラッキーカラーは今年に続いて「赤」そして「白(一部で白に近い黄色との見方も)」になるーと言われていた。当レターでも、昨年の12月28日付でレポートしている。

それを踏まえて、世間を振り返ると、野球は昨年同様に「赤ヘル軍団」の広島カープが2連覇を達成、サッカーは同じく赤を基調とした浦和レッズがACL(アジア・チャンピオンズ・リーグ)を10年ぶりに制覇するなど躍進が目についた。ただ、今年は昨年ようにラッキーカラーが「赤」一色ではなく、「白(もしくは黄)」と分散したためか、「赤」を基調としたチームには終盤にかけての息切れ感も。広島は日本一に届かなかったうえ、浦和も国内リーグ戦は奮わない成績に終わっている。

いずれにしても、同様の視点から来年を考えると、干支は「戌(いぬ)」で、そのラッキーカラーは「オレンジ」「ピンク」「黄色」「ゴールド」ーなどになるという。

今年の金融市場は、連日のように史上最高値更新のニュースが報じられたNYダウを中心とした米株、ならびに年の後半にかけては仮想通貨ビットコインの動静に目を奪われることが多かったが、来年のラッキーカラーから推測すると、ゴールドを中心とした貴金属市場が復権、市場動意の中心となる可能性もありそうだ。

<< 末尾に「8」のつく年 >>

西暦で末尾に「7」がつく年を調べてみたところ、1987年にはブラックマンデー、1997年はアジア通貨危機、2007年のサブプライム問題ーなど大事件が相次ぎ観測されていた。筆者は、今年についても、前記した昨年12月28日付の当レターで注意を喚起している。

その結果として、「北朝鮮の核実験」をはじめ、幾つかの危ない事件・国際状況などは観測されたものの、取り敢えずここまでは「7」の年を無事に乗り切ってきた感を否めない。

それに対し、来年である末尾「8」の年は、そこまで極端な動静はうかがえないが、金融市場的にはちょっと面白い傾向がうかがえる。

そのひとつはドル/円相場が大荒れの傾向を示すことが多く、変動相場制以降、過去4回の「末尾8年」を見てみると1988年を除く、残り3回はすべて「大相場」。具体的には、1978年が年間変動幅67.0円で年間変動率は28.2%、1998年は同36.2円、同27.7%、前回2008年は同24.8円、同22.2%で、いずれも平均的な年間変動率の17%を大きく上回る結果となっていた。

一方、1998年に記録したドル高値147.64円のように、「8の年」は「ヒストリカルハイ」など象徴的なレートをつけることが少なくないことも特徴のひとつと言えるかもしれない。金融業界で指摘される「戌笑う(いぬわらう)」の格言どおりの展開となるとすれば、正直、筆者個人の見通しとは異なるのだが、2018年はかなりのレベルまでドル高・円安が例え一時的にらせよ、進行する可能性を否定出来ない気もしている。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

